

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	佐金 武
論文題目	時間にとって十全なこの世界 ―現在主義からのアプローチ―		
<p data-bbox="183 398 438 432">（論文内容の要旨）</p> <p data-bbox="162 439 1428 741">本論文は20世紀の分析哲学の伝統に従った時間論を扱う。20世紀の分析哲学の伝統においては、時間の本性とその実在性・非実在性が問われてきた。時間の本性とは、時間が過去・現在・未来という「時性」的性格をもち、非対称的な構造からなる流れのようなものであるのか、それとも、「時点」にかんする先後関係によって特徴づけられる永続的な世界の次元であるのか、という問題である、また、時間の実在性・非実在性とは、こうした特徴をもつ時間がその本性からして矛盾した存在者である（したがって実在しない）のか、そうではない（したがって実在する）のか、という問題である。</p> <p data-bbox="162 748 1428 1016">これらの問題は形而上学の根本問題として、哲学の歴史において一貫して問題視されたことであるとも言えるが、この問題が特に鋭い形而上学的難問を突きつけていると意識されるようになったのは、20世紀初頭、イギリスの観念論哲学者マクタガートが厳密な分析的手法のもとで、時間の非実在性を説得的に論証して以来のことである。本論文はマクタガート以来100年に及ぶこの議論展開の流れを整理しつつ、特に「現在主義」という立場を前面に押し出すことによって、時間の本性とその実在性を解明・論証しようとした論文である。</p> <p data-bbox="194 1023 1182 1057">本論の全体の構成は5章からなり、各章の内容は以下の通りである。</p> <p data-bbox="162 1064 1428 1603">第1章では、分析哲学における時間論の礎となったマクタガートの「時間の非実在性証明」を概観する。筆者はこの議論が現代の論争にどのように引き継がれてきたかを整理し、基本的な対立の構図（時制理論と無時制理論の対立、および時制理論内部での三つの競合理論という構図）を明らかにする。次に、こうした論争状況を背景として、本論が依拠する現在主義の立場をオントロジー（「なにが存在するか」にかかわる存在論の領域）とアイデオロジー（「なにを意味するか」にかかわる観念論の領域、あるいは単に存在論以外の形而上学の領域）の両面から動機づける。現在主義とは、現在存在するものと、そのかつてのあり方、今のあり方、そしてこれからのあり方が実在のすべてだというテーゼである。現在主義はその儉約的な存在論により、現在の特別さを真に正しく扱うことができる。とはいえ、現在主義の真価を理解するには、その存在論に着目するだけでは十分とはいえない。現在主義のプログラムの大きな目標の一つは、変化の次元としての時間という考えをめぐる、マクタガートが提起したアイデオロジーの問題について一つの確かな見通しを与えることであり第1章末部はその可能性を予告する部分である。</p> <p data-bbox="162 1610 1428 1995">これに続く4つの章は、大きく二つの部分からなる。第2章および第3章では、主として現在主義の存在論を擁護する。現在主義は、存在者の節約の観点から動機づけられる一方、過去や未来の存在にコミットすることなく、過去言明や未来言明の真理をいかにして説明することができるかという難しい問題を生じさせる。また、相対性理論をはじめとする現代の科学において、過去や未来の存在が仮定されるとすれば、現在主義は窮地に陥ることになるだろう。これらの問題についてはそれぞれ、第2章と第3章が中心的テーマとして扱う。また、第4章および第5章では、主にアイデオロジーの領域において現在主義の利点を明らかにする。特に、第4章では時間の経過という考えについて、そして、第5章では過去と未来の非対称性という考えについて、現在主義が一つの明確なヴィジョンを与えうることを論じる。</p> <p data-bbox="162 2002 1428 2072">まず、第2章では真理の基礎づけの問題を扱う。存在論としての現在主義は、現在のみが存在するというテーゼである。この存在論に対する次のような批判がある。真</p>			

理の基礎づけの原理にしたがえば、真理は存在に基礎をもたねばならない。しかし、現在のみが存在し、過去や未来は存在しないとすれば、過去や未来についての明白な真理が存在に基礎づけられないのではないか。現在主義を前提する場合、たとえば、「ソクラテスは哲学者だった」という過去言明の真理は、一体どのような存在に基礎づけられるのか。

この問題に対処するために、第2章では真理の基礎づけの問題を正確な形で提起することに努め、議論の柱となるいくつかの重要な前提について説明を加える。次いで、特にこの議論が依拠する基礎づけの原理をとりあげ、一般的な視点から考察を加える。その後、取り扱われる過去言明の種類に応じて、現在主義にとって利用可能と思われる解決策を網羅的に検討する。現在存在するものについての過去言明の場合、そうした対象に対する過去時制や未来時制の述定が問題になるだろう。もはや存在しないものについての一般言明の場合、その真理を基礎づける何らかの根本的存在者についての考察が不可欠になる。最後に、もはや存在しないものについての単称言明の場合、単称命題の存在はその構成要素に依存するかどうか争点となる。この議論を通じて、現在主義は真理の基礎づけの問題によって決して破滅的な状況には追い込まれないことが示される。

次に第3章では、現在主義と相対性理論の両立可能性が探される。よく知られているように、特殊相対性理論（STR）においては、同時性は採用する座標系に相対的にのみ決定することができる。そして、これらの座標系はどれも対等で特権化されておらず、したがって、特殊相対性理論において絶対的な同時性は存在しないように思われる。他方、現在主義は現在のみが存在すると主張することによって、絶対的な現在が存在することを含意する。しかし、絶対的同時性が存在しないならば、絶対的な現在も存在しないはずであり、それゆえ、現在主義はSTRと両立できないように思われる。この問題を精査し、一定の応答を試みるのが第3章の主たる目的である。

そのためにまず、パトナムにより提起された現在主義に対する有名な反論を概観する。そして、この批判の要点を整理した上で、現在主義にとって最善の応答を模索する。現在主義と特殊相対性理論の両立（不）可能性をめぐる問題は、光による同時性の定義において絶対的同時性（端的な存在によって規定される同時性）は一切登場しないことに起因する。しかしながら、何が存在するかがこの光学的同時性によって決定されると考えるのでない限り、特殊相対性理論から現在主義を排除するような帰結は生じない。これに加えて、第3章末部では、現在主義と（特殊および一般）相対論の両立可能性について一つの展望が示される。

第4章では、変化の次元としての時間という考えを検討する。三つの空間的次元から時間を区別するメルクマールは変化である。なぜなら、時間は経過するからである。この比喩的な語り方のなかには何らかの真実が含まれていると考えられる。そこで筆者は、現在主義の立場に基づくプライアーの時間論を手がかりに、時間の経過という考えの実質を考察する。プライアーによれば、ものは変化するゆえに、そのあり方を表現する言明も真理値において変化する。これが時間の経過に他ならない。第4章の主たる目的は、こうしたプライアーの時間論を現代の文脈において読み直し、ありうる様々な反論に対してそれを擁護することである。

そのためにこの章ではまず、時間に対する二つの見方、すなわち「時制理論」と「無時制理論」の相違を、言明の真理値における変化という観点から特徴づける。次いで、言明の真理値における変化がいかにして可能かを考察するが、出来事の変化によってこれを説明するマクタガートの考えに抗するため、ものの変化によってそれを説明するプライアーの考えを対置する。さらに、ものの変化と出来事の変化の各々にまつわる、よく似た形式の二つのパラドクスを考察する。それにより、出来事の変化に依拠するマクタガートの考えを棄却する根拠を示すとともに、ものの変化に依拠するプライアーの考えを動機づける。これに加えて、言明の真理値における変化という

考えに対する無時制理論からの反論をとりあげ、現在主義にはそれに対するシンプルな応答が可能であることを示す。

最後に、第5章では、時間の非対称性について考察する。既に述べたように、存在論としての現在主義は現在のみが存在するというテーゼである。それゆえ、過去はもはや存在せず、未来はまだ存在しない。他方、時間に関する日常的な比喩のなかには、「未来は開かれているが、過去は既に固定されている」というような、過去と未来の非対称性を示唆する表現が散見される。しかし、現在主義の考えに基づけば、一見するとこのような比喩には確かな根拠はないように思われる。この問題意識を出発点として、現在主義に過去と未来の非対称性を導入する可能性を探る。

ここでの議論の流れは次の通りである。最初に議論の基礎となる現在主義の理論を提示する。そして、これに実装可能な非対称性の原理を確立し、三つの反論に答えつつこの原理の理解を深める。ここから明らかになることは、時間の非対称性の原理は決定論の否定に基づく、ということである。（ただし、決定論の否定は時間の非対称性にとっての十分条件ではない。）そこで、決定論の否定が実際に可能かどうかを検討する。そのために決定論は論理的な根拠のみに基づいて導くことができるとするテイラーの議論をとりあげ、その誤りがどこにあるかを明確に指摘する。これらの議論が正しければ、過去と未来の非対称性を考える上で現在主義のアプローチが有効であることが示される。

以上が本論の各章の内容である。本論の結論は、もしも以上のような議論の試みが成功を収めるとすれば、現在主義は十分に維持可能であることが示されるだけでなく、時間の本性を明らかにする他の試みに対して、それがもつ利点も明らかになるであろう、ということである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は「時間」という世界の根本的な次元について、その本性と実在性について論じる論文である。時間とは「過去・現在・未来」という非対称的な時制によって表わされるような、「流れる」存在であるのか、それとも、時点間の「先後」という二項的關係によって表わされるような、事態や事物の永続的性質であるのか。そもそも、時間は実在する性質や存在であるのか。これらの問題は形而上学の根本問題として、哲学の歴史において一貫して問題視されたことであるとも言えるが、この問題が特に鋭い形而上学的難問を突きつけていると意識されるようになったのは、20世紀初頭、イギリスの観念論哲学者マクタガートが厳密な分析的手法のもとで、時間の非実在性を説得的に論証して以来のことである。本論文はマクタガート以来100年に及ぶこの議論の展開の流れを整理しつつ、特に「現在主義」という立場を前面に押し出すことによって、時間の本性とその実在性を解明・論証しようとした論文である。

本論文において筆者はマクタガートへの理論的対応の可能性をさまざまな角度から考慮したうえで、いわゆる「存在論的な節約」という観点からみて、「現在主義」の考えがもっともすっきりとした存在論であると論じる。存在論的な節約とは、存在者の種類を必要以上に増やしてはならないというオッカム以来の存在論における方法論的格率である。現在主義とは、現在存在するものと、それのかつてのあり方、今のあり方、そしてこれからのあり方が実在のすべてだというテーゼである。この立場は存在論的に明快な立場であるばかりでなく、マクタガートが提出した時間の非実在性を回避するという利点をもっている。時間の非実在性とは、時間を「過去・現在・未来」という非対称的な時制からなる存在者と見るかぎり、時間にかんする言明には解決不可能な論理的矛盾が含まれてしまうために、時間にたいして実在性を付与することはできない、という議論である。

現在主義はこの矛盾を端的に回避することができるが、その反面で、過去や未来の存在にコミットすることなく、過去言明や未来言明の真理をいかにして説明することができるかという難問を生じさせる。また、相対性理論をはじめとする現代の科学において、過去や未来の存在が仮定されるとともに、現在という絶対的な同時性の存在論的優位が否定されている。したがって現在主義は科学理論との共存にも失敗する恐れがある。さらに、現在主義はただ過去言明や未来言明の真理性を確保するという課題だけでなく、過去と未来の間の非対称的に見える関係をどのように説明するかというもう一つの課題をも負う。

本論文は全体が五章からなり、最初の二章においてマクタガートへの対応策としての現在主義の立場の説明と、この立場に課せられるべき哲学的課題の整理がなされる。そして、第三章以下での三つの章では、上に挙げた過去言明・未来言明の真理性の説明など、言明の真理、形而上学的時間論と科学理論、時間の「非対称的な流れ」の意味、の問題が扱われる。これらの吟味を通じて本論文は、結論として、現在主義の立場が理論的に克服不可能な本質的困難を抱えるものではないこと、また、この時間解釈がわれわれの日常的・常識的な時間理解に背馳するものでもないこと、を主張する。筆者の考えでは、現在主義という時間論は、マクタガート以来の100年にわたる分析哲学的形而上学の伝統の最新の成果として、高く評価しうる立場なのである。

本論文はこのように、分析的形而上学というある種限定された方法と関心とからではあるが、存在論、真理論、科学論に及ぶ哲学の根本的な主題にかんして非常に包括的な検討を行おうとした研究の成果であり、論文全体の構成、論旨の筋道が明快な論文である。本論文にかんして特筆すべき長所は、現代の分析哲学的形而上学

における時間論のさまざまな議論や理論的立場について、きわめて網羅的な調査を行ったうえで、それぞれの議論の意義を冷静に評価し、現在の時点での暫定的な結論を提示しつつ、なお残されている未解決問題についてもその焦点を明らかにし、この主題にかんする今後の研究の進むべき方向をはっきりと示している点にある。

特に、筆者がプライアー、サイダー、ビゲロー、クリस्प、ジーマーマン、アームストロング、メラー、プリーストを始めとする、現代の多数の論理学者、形而上学者の所説を縦横に参照し、その内容を咀嚼整理したことは、十分に評価できる点である。また、様相論理学から一般相対性理論における四次元多様体の解釈まで、形式的分析の面でも厳密な議論を展開している。本論文が取り上げた形而上学の各論について言えば、世界の変化を論じる際に重要な区別となるべき、「もの」の変化と「出来事」の変化の対比にかんする議論などにおいて、鋭利な分析を展開していると考えられる。

一方、本論文においてなお不十分と思われる点としては、この時間論と他の思想伝統における形而上学との連関の見通しがかなり曖昧であることが挙げられる。論文中にはルクレティウス説の現代的再解釈など、いくつかの思想史的広がりをもつ主題が扱われているが、これらについての議論には十分な掘り下げが見られない点が惜しまれる。論者の今後の研鑽を期待したい。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成25年9月3日に、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。